The Japanese Orthopaedic Society for Sports Medicine

日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.14 2015 年 3 月 31 日発行

第 40 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会報告

会長　松本　秀男

2014 年 9 月 12 日（金）～14 日（日）の 3 日間、完成したばかりの「虎ノ門ヒルズフォーラム」で第 40 回日本整形外科スポーツ医学会（JOSSM）学術集会を開催させて頂きました。テーマは「今、スポーツ医学に求められるもの― 2020 に向けて―」です。2020 年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが決定致しましたので、これから、そして 2020 年のその瞬間、我々スポーツ医学を志す者として何が出来るかを皆で考える会にしようというのを学術集会のテーマに致しました。3 日間で名誉会員 12 名、正会員 546 名、コメディカル 251 名、非会員 254 名、初期臨床研修医 12 名、学生 31 名、招待者 64 名の合計 1,170 名にご参加頂き、盛会裏に終了することが出来ました。この紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。

JOSSM は整形外科とスポーツ医学を繋ぐ大切な学会だと思います。スポーツ医学にはスポーツ外傷・障害の予防や治療、スポーツ栄養、スポーツ心理、運動療法、トレーニング、環境、時差への適応、アンチドーピングなど実に様々な領域がありますが、運動器の外傷・障害の予防や治療を主に担当する整形外科の役割は極めて重要です。2020 年に向けての我々の出来ることは、この「スポーツ外傷・障害の予防や治療」をさらに発展させながら、選手を可能な限り良い状態で現場に送り出すことだと思います。現在は全く名前の挙がっていない少年少女が 2020 年には大活躍する可能性もあります。2020 年に活躍するであろう若いアスリートが障害なく 2020 年を迎え、最大限のパフォーマンスを発揮できることを、多くの国民は期待しています。更に、国民の間にスポーツへの期待が広まるこの絶好の機会に、一般のスポーツ愛好家や市民のスポーツ活動を活性化してくことも、我々スポーツ医学を志す者の重要な使命でしょう。

写真 1：河野一郎日本臨床スポーツ医学会理事長

今回の学術集会では、まず冒頭に 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの日本誘致に重要な役割を果たされた日本臨床スポーツ医学会理事長の河野一郎先生に特別講演として、「2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会への期待」をお話し頂きました（写真 1）。東京オリンピック・パラリンピックが決定するまでの一般にはあまり知られていない様々なエピソードについてお話し頂きました。我々が無邪気に喜んでいる「2020 年東京オリンピック・パラリンピック」も実は薄氷を踏む思いで獲得することが出来たことを知り感動致しました。

次いで学会のメインのシンポジウムである「学会活性化に向けた提言―更なる発展を目指して」と題して高岸憲二理事長と西良浩一理事に司会をして頂き、今後の日本整形外科スポーツ医学会の進むべき道について議論頂きました（写真 2）。シンポジウムには現在は徳島大学運動機能外科に所属されている室伏由佳選手にも「アスリートが望むスポーツドクターおよびスポーツ医学会」というテーマでお話し頂き、アスリートの立場から今後の学会のあるべき姿をご指摘頂きました（写真 3）。

写真２：メインのシンポジウム「学会活性化に向けた提言―更なる発展を目指して」

写真３：向かって左から、西良浩一理事、室伏由佳選手、高岸憲二理事長

写真４：学術集会を終えて：慶大スポーツ医学教室員

現在日本のスポーツ医学会は問題が山積みです（詳細は省きますが…）。アスリートはスポーツ医学に何を望んでいるのか、現場ではどの様なことが問題になっているのか、そして、今後は皆でどの様に問題を解決していけばいいのか等について有意義な議論が出来たと思います。

教育研修講演は、川島隆太先生「脳科学のスポーツへの応用」、田中康仁先生「ダンス・舞踏による足・足関節傷害の病態と治療」、長谷公隆先生「スポーツパフォーマンス向上のための運動学習理論」、有吉与志恵先生「コンディショニング（整える）～ジュニアからトップアスリートまで～」、石上惠一先生「咬合とスポーツパフォーマンス」、名倉武雄先生「動作解析によるスポーツ動作中の下肢関節機能評価」の６題でした。いずれも、普段の視点をちょっと変えて見る感じの講演で、今後の臨床に大いに役に立つヒントが散りばめられていたと思います。

スポーツ医学の現場では知識ばかりでなく、様々な技術も必要です。関節外傷や障害の治療になくてはならない関節鏡視下手術や近年急激に進歩した超音波診断法などです。これらの技術習得を目的に少人数制のワークショップも行いました。その他、シンポジウム９題、パネルディスカッション３題、ランチョンセミナー８題を行い、スポーツ医学の様々な側面から活発な議論をして頂きました。一般演題も口演、ポスターとも多くのご応募を頂き、最新の知識が共有出来ました。

そして、今回の学術集会の最も大きな目標は、韓国整形外科スポーツ医学会（KOSSM）、そしてGOTSとの更なる協調、発展です。これまで、KOSSMやGOTSとの間で、合同会議やtraveling fellowの交換など定期的な交流はありましたが、これを更に進めて、より深い関係に出来ることを目指しました。まずGOTSの会長であるProf. Victor Valderrabanoに招待講演をお願いし、快く引き受けて頂きました（実際は当日体調を崩されて、講演は来日していたGOTS fellowに代読して頂きましたが）。Prof. Victor Valderrabanoとは学会終了後も何度かメールのやり取りを行い、今後GOTSとJOSSMの更なる発展を約束致しました。またKOSSMから前会長、現会長、次期会長等数名のfacultyをお呼びし、高岸理事長他こちらも数名のfacultyと何度か会議を行って、今後の関係発展について討論致しました。今後は毎年、それぞれの学会に招待講演を企画するなど、新しい関係発展を進めることになりました。一方、同時に開催した第12回JOSSM―KOSSM合同会議は、言語の問題等もあったのでしょうか、ちょっと表面的な学会になってしまいましたので、今後、第13回以降は開催方法、企画などに更なる工夫が必要だと感じました。

2015年の第41回JOSSM学術集会は京都で久保俊一先生の元で開催されます。JOSSMが更に発展し、

またGOTSやKOSSMとも更なる関係強化が出来ることを期待しております。会員の皆さんにも積極的にご参加頂き、素晴らしい学術集会にして頂きたく、お願い申しあげます。

最後に第40回JOSSM学術集会を成功に導いて頂いた全会員の先生方、参加頂いた先生方、事務局の方々、そして教室員の諸君（写真4）に深謝して、筆を置きたいと思います。ありがとうございました。

第 41 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会開催について

会長　久保　俊一

第 41 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を 2015 年 9 月 11 日(金)、12 日(土)の 2 日間、ウェスティン都ホテル京都において開催させていただきます。伝統ある本学術集会を京都の地で開催させていただくことを誠に光栄に存じます。

2020 年には東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しています。国民のスポーツへの関心は今後ますます高まり、さまざまな競技において老若男女ともスポーツ人口が増加し、スポーツ障害や外傷も増加すると予想されます。このため予防や治療を担うスポーツ医学や医療の役割は今後さらに重要になると考えます。近年、医学のあらゆる分野で科学的根拠の必要性が高まっており、スポーツ医学も例外ではありません。経験を補うエビデンスを集積する努力が欠かせません。研究者でもある医師がエビデンスをもとに治療を行っていくべきです。また、研究で得られた成果を選手や指導者にも広く啓発し、一層のパフォーマンスの向上に役立てることも求められます。

このような背景から本学術集会のテーマを「エビデンスに基づく整形外科スポーツ医学―選手、指導者、医療チームの一体化を目指して―」としました。スポーツの現場におけるチームワークやコミュニケーションの重要性について女子サッカーワールドカップで日本代表を優勝に導いた佐々木則夫氏に特別講演を、弘前大学の藤哲先生に基調講演を行って頂く予定です。招待講演，教育研修講演およびランチョンセミナーではスポーツ損傷，オリンピックおよびドーピングなどで著名な先生方にご講演頂きます。シンポジウムでは 6 つの代表的な種目を選び、種目別にプログラムを組みました。サッカー、柔道、バスケットボール、野球、ラグビー、陸上の各種目におけるスポーツ損傷について、医師や療法士だけではなく監督やトレーナーなど指導者の方たちにも講演して頂きます。競技場で診る医師、病院で診る医師、トレーナー、コーチ、監督など一人の選手に多くのひとが関わっています。複数の立場からの意見を聞ける貴重な機会です。是非、活発な討論を交わして頂き、一人でも多くの選手に還元され、競技レベルの向上につながることを期待しています。また、身体の部位ごとのスポーツ損傷についてもシンポジウムを企画しました。肩関節、肘関節、手関節・手、股関節、膝関節、足関節・足の 6 ヵ所に分け、それぞれの部位ごとに特定の疾患や病態を取り上げ、第一線でご活躍の先生方にご講演頂く予定です。その他、超音波画像診断や関節鏡手技に対するハンズオンセミナーなどを企画しています。本学会ではスポーツ整形外科の分野で蓄積された知識や技術をいま一度整理していただき、明日の診療や研究に活かしていただきたいと思います。

京都の夜も 9 月に入ると過ごしやすくなります。全員懇親会ではジャズの生演奏を企画しております。参加者の皆様には京都の夕べを大いに満喫していただきたいと思います。皆様のご参加をお待ち申し上げております。

なお、本学術集会の情報は逐次下記ホームページにアップロード致しますので、ご確認のほどよろしくお願い致します。

■ 学術集会のホームページ
http://www.congre.co.jp/jossm2015/

■ 演題募集期間
平成 27 年 2 月 17 日(火)～3 月 31 日(火)　正午
演題はすべてインターネットを利用したオンライン登録

■ 事務局
京都府立医科大学大学院医学研究科運動器機能再生外科学(整形外科)

■ 事務局長
新井　祐志
〒 602-8566
京都市上京区河原町広小路上る梶井町 465
TEL：075-251-5549　　FAX：075-251-5841
E-mail：y123arai@koto.kpu-m.ac.jp

■ 運営事務局
株式会社コングレ
〒 541-0047　大阪市中央区淡路町 3-6-13
TEL：06-6229-2555　　FAX：06-6229-2556
E-mail：41jossm@congre.co.jp

2014 JOSSM-USA Traveling Fellow 体験記（前半）

群馬大学整形外科　大澤　貴志

今回私は2014年6月30日より7月19日までの3週間、JOSSM-USA Traveling Fellowに大阪大学整形外科　前達雄先生、奈良県総合医療センター整形外科　磯本慎二先生とともに参加させて頂きました。2014 AOSSM annual meeting参加の他、4施設を訪問させて頂きました。University of Pittsburgh、Stanford University、Pennsylvania University, Penn Sports Medicine、Thomas Jefferson University Hospitalを訪問させて頂きましたが、自分は旅の前半のPittsburgh University、Stanford Universityについて報告させて頂きます。

University of Pittsburgh

6月30日より7月4日までUniversity of PittsburghのFreddie Fu教授に大変お世話になりました。また、現地では神戸大学整形外科　西澤勇一郎先生、川上洋平先生、名古屋市立大学整形外科　小林真先生には大変手厚いおもてなしをして頂きました。この場をかりて御礼申し上げます。手術見学ではFreddie Fu教授の情熱的なこだわりを拝見させて頂きました。手術の前には専門医研修に当たるFellowshipの先生方への怒涛の質問、ACL再建術の最中の丁寧な説明と大腿骨側、脛骨側骨孔位置へのこだわり、現在考えている研究なども丁寧に教えて頂きました。非常にエネルギー溢れる先生ですが、ユーモアと周りへの配慮も忘れない非常に素晴らしい先生でした。Tashman先生のBiodynamics Laboratory、J Huard先生のStem cell centerも見学させて頂きました。また、途中にはACL Research Meetingにも参加させて頂き、Fu先生のACL再建術に対するこだわりを見せて頂き、感銘を受けました。臨床と基礎をどちらも大事にし、一つの目標に向かっている施設であり、日本は勿論世界中から研究者が集まる理由も納得できるものでした。

Stanford University

移動日を挟んで7月7日より9日までStanford UniversityのJohn G. Costouros先生にお世話になりました。Costouros先生は肩肘関節専門でありますが、Gary Fanton先生のSports Medicine Serviceによる膝関節の手術も見学させて頂く事が出来ました。ACL再建術についてはAllograftを用いての1重束再建術であり、Allograftを使える点では日本との違いを感じました。これらはすべて外来手術で行われており、日本との医療事情の違いを実感しました。また、Costouros先生の外来診察も見学させて頂きましたが、患者さんに対するゲストを扱うような丁寧な対応には驚きを感じました。しかしながら、この施設の場合はIMMUNIZATIONS HISTORY REQUIREMENTSについての書類提出が非常に厳格であり、訪問前に提出した書類にて許可がおりたと考えていた所、当日朝に書類を見直すという事態が起こってしまい、時間のロスになってしまいました。施設としては見学すべき点は沢山ありますが、書類の作成については注意を要すると思います。

写真：手術室にて（左より、名古屋市立大学整形外科　小林真先生、奈良県総合医療センター整形外科　磯本慎二先生、自分、University of Pittsburgh Freddie Fu教授、大阪大学整形外科　前達雄先生、神戸大学整形外科　西澤勇一郎先生）

最後に

今回の訪問により、米国のみならず、国外の学会、研究施設と関わりを持つことの重要性を感じることが出来ました。自分の経験、世界の方々の経験を共有することで、新たな発見、よりよい医療に結びつくのではないかと考えます。最後になりましたが、このような素晴らしい経験をさせて頂いた、当学会理事長　群馬大学整形外科教授　高岸憲二先生、副理事長　聖マリアンナ大

学整形外科教授　別府諸兄先生、国際委員会担当理事　船橋整形外科病院整形外科　菅谷啓之先生、国際委員の先生方、日本整形外科スポーツ医学会　事務局の方々に深謝申し上げます。

2014 JOSSM-USA Traveling Fellow 報告（後半）

奈良県総合医療センター整形外科　磯本　慎二

はじめに

筆者は、第3回 JOSSM-USA Traveling Fellow として大阪大学の前先生、群馬大学の大澤先生とともに 2014 年 6 月 30 日から 7 月 19 日までの 3 週間米国を訪問させていただきました。大澤先生の前半の報告に引き続き、米国整形外科スポーツ医学会（AOSSM）学術集会およびフィラデルフィアの 2 施設を訪問した報告をさせて頂きます。

AOSSM 2014 Annual Meeting（7 月 10 日～12 日）

サンフランシスコからシアトルに移動し、AOSSM 学術集会に参加しました。同学会では整形外科スポーツ関連の演題がたくさんありました。日本ではあまりない、Cadaver を使った手術デモンストレーションのワークショップにも参加し、学会での教育も充実していることを実感できました。また、高岸先生、別府先生からご紹介いただき、会長の Hannafin 先生を始め、米国の著名な先生方や他国からのフェローと交流する、とても貴重な経験もさせていただきました。

University of Pennsylvania, Penn Sports Medical Center（7 月 14 日～16 日）

学会終了後、フィラデルフィアに移動し、ペンシルベニア大学を訪問しました。同大学の医学部は全米最古の歴史があり、現在も保存されている当時の病院を見学しました。ヨーロッパの医学書を集めた図書館や天井からの太陽光を利用した手術室など、米国医療の原点を垣間見ることができました。

我々は Brian J. Sennett 先生をトップとする Penn Sports Medical Center を中心に訪問しました。手術見学は James Carey 先生の膝の手術、John Kelly 先生の股関節鏡手術などを見学させていただきました。小児スポーツ障害の治療は、小児専門病院である The Children's Hospital of Philadelphia（CHOP）で行われており、Theodor J. Ganley 先生の膝の手術を見学しました。CHOP も全米最古の小児病院としての歴史がありますが、現在はとても新しい綺麗な建物となっており、子供が喜ぶように、インテリアにもこだわった、素晴らしい病院でした。

写真：Sennett 先生宅でのパーティーにて（左から、前先生、Carey 先生、筆者、Sennett 先生、大澤先生、Sennett 先生の奥様）

カンファレンスで、発表する機会もいただき、スタッフの先生方とのディスカッションを楽しむこともできました。基礎研究部門も充実しており、その施設と機器の規模の大きさに驚かされました。3 日間ともに夜はディナーに招待していただき、なかでも Sennett 先生宅での広いお庭でのバーベキューパーティーは、郊外の邸宅での優雅な雰囲気を楽しむことができました（写真）。

Thomas Jefferson University（7 月 17 日～18 日）

最後に Thomas Jefferson University の Steven M. Raikin 先生を訪問しました。Raikin 先生は足の外科医で、スポーツ以外の足の手術もたくさん行っていました。初日はカンファレンスで我々の発表とディスカッションを行った後、手術を見学しました。Raikin 先生の手術はとても速く、素晴らしいテクニックでした。翌日は外来を見学させていただきました。診察の合間に過去の症例の画像を見ながら、たくさんの面白い話をしていただきました。

最後に

今回の訪問により、米国をより身近に感じることができるようになりました。このような貴重な機会を与えていただいた、日本整形外科スポーツ医学会の国際委員会の先生方をはじめ、関係者の皆様に感謝いたします。今後は、この経験を活かして、スポーツ医学分野での国際交流に貢献できるよう、より一層の努力をしていきたいと思います。

お知らせ

1. American Journal of Sports Medicine（AJSM）の購読について

本学会の会員は、American Journal of Sports Medicine（AJSM：年 12 冊発行）を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格
AJSM 購読	$183.-	$102.-
オンライン購読	一般向けサービスなし	$ 30.-

AJSM 購読、オンライン購読のどちらにお申し込みいただいても、1972 年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。
特別優待価格での購読を希望される会員のかたは、事務局あてメールにて購読希望である旨をご連絡ください。（info@jossm.or.jp）追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自購入手続を進めてください。

2. 会員登録情報の変更、メールアドレスの登録について

勤務先、自宅、メールアドレスに変更がありましたら、お早めに事務局あてメールにてご連絡ください。（info@jossm.or.jp）
ご連絡がない場合、学会雑誌をはじめ事務局からのご案内がお手元に届かないことがありますのでご了承ください。
また、日々のご連絡の他、学会情報や演題登録のご案内など、今後は一斉メールを活用して事務局からご案内をお送りいたしますので、メールアドレスをご登録いただいていない方は、事務局あてご連絡ください。

編集後記

第 40 回本学会は東京の新名所として華々しくオープンした虎ノ門ヒルズで開催されました。松本秀男学会長は前日の会長招宴でピアノ演奏を披露され、和やかな雰囲気を演出されていました。学会のテーマは「今、スポーツ医学に求められるもの― 2020 に向けて―」でした。2020 年東京オリンピックに向けて我々に何ができて、6 年後に向けて何ができるのかが議論されました。特にスポーツ外傷・障害の治療戦略や予防など 2020 年を意識したセッションが目立ちました。

昨年はなんといっても錦織選手の全米オープン準優勝でテニスブームが復活し、野球、サッカー、ゴルフに次ぐプロスポーツとしての位置づけが確立しました。スポーツを愛する会員の皆様にとって、選手育成、障害予防、そして治療・リハビリについて改めて考える機会が増えることと思います。ブラジルワールドカップは日本サッカーにとっては悔しい結果になりましたが、何よりも王国ブラジルの大敗が衝撃的でした。今後のサッカー市場の行方にも影響を及ぼすとともに、日本の取るべき戦術や育成も考えさせられた大会でした。スポーツ選手は何よりも育成が重要であり、その過程での障害による脱落や停滞は致命的です。私達は選手の最高到達度を世界レベルにできるようにトレーニングにマッチした予防・治療の視点を持たなくてはなりません。今後も 2020 年に向けて大いに議論が進むことを期待します。　（平野　篤）

日本整形外科スポーツ医学会　ニュースレター No.14　2015 年 3 月 31 日発行

編　集：日本整形外科スポーツ医学会広報委員会
酒井 宏哉（担当理事）、金岡 恒治（委員長）、亀山 泰（アドバイザー）
大槻 伸吾、平野 篤、村 成幸、安田 稔人、山﨑 哲也

発　行：一般社団法人日本整形外科スポーツ医学会
〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 株式会社コングレ内
TEL 03-3263-5896 ／ FAX 03-5216-3115
E-mail info@jossm.or.jp　URL http://jossm.or.jp/